

日本体操学会会報 Vol.18/2022.6

ごあいさつ

日本体操学会会長 後藤 洋子

そろそろ梅雨の季節となりましたが、会員の皆様におかれましては益々ご清勝のことと、お喜び申し上げます。

さて、令和4年3月5日、6日に、日本体操学会第21回大会がオンライン（Zoom）により開催されました。当初は北海道教育大学旭川校を会場として対面での開催予定でしたが、コロナ禍が収束せず、再びオンラインでの開催となりました。「体操（指導者）の専門性とは？」というテーマで、様々な立場から発表、話題提供がありました。終了後には特設サイトにより動画も公開されました。新しい形による情報提供が行われております。

ここに学会大会の情報を中心に会報が作成されましたので、会員の皆様にお届け申し上げます。「振り返り」の手掛かりとなれば幸いです。

今ではコロナ禍が常態化しつつあります。感染予防に努めながら、慎重に様子を見ながら判断してまいりましょう。次回、皆様とお目にかかれる日を楽しみにしております。

日本体操学会第21回学会大会報告

第21回学会大会が、Webにて開催されました。

- 開催日 令和4年3月5日（土）・6日（日）：基調講演、シンポジウム、研究発表、公募研究発表等
オンデマンドによる配信 ～3月31日（木）
- テーマ 体操（指導者）の専門性とは？
- 学会大会の内容（日本体操学会 HP 参照）<https://taisou.jp/convention/info/>

挨拶・オープニングイベント

学会大会に先立ち、後藤洋子学会会長より開会の挨拶があった。その後のオープニングイベント（一緒に体操）では、鈴木大輔氏らが作成した多世代で楽しめる体操絵本『のびー！』が紹介された。今井菜津美氏（NHK テレビ・ラジオ体操アシスタント）の実演に先導されながら、『のびー！』のイラストと同じように皆でたくさん伸びることができた。オンラインではあったものの、「動いて学ぶ会」にふさわしいオープニングイベントであった。



基調講演

帝京平成大学の馬場宏輝氏より「運動指導者（スポーツ指導者）に求められる専門性とその確保（担保）」というテーマのもとご講演をいただいた。

スポーツ指導者の資格制度やその分類について詳しく述べられた。資格には法的根拠のある資格とそうでない資格に分けられ、「有資格者が増えることに意味のある資格」と「資格者が増えると価値が下がる資格」に大別されると述べられた。現在は、資格乱発社会とも言え、その資格の存在意味が重要になっているが、その資格をどのように活用するかまで定められているものは少ない現状であることも問題点として指摘された。体操においては、日本スポーツ協会の資格があるが、体操競技や新体操の下位的な資格ではなく、一般体操の専門性を高めるような資格があって良いのではとの提案がなされた。

ギムナスティック・シンポジウム

「指導の現場から考える体操（指導者）の専門性」をテーマに3名のシンポジスト（教員養成の立場から後藤洋子氏、社会体育の立場から春山文子氏、体育・スポーツ専門家養成大学の立場から長谷川聖修氏）による講演の後、参加者を交えたディスカッションがあった。

<教員養成の立場から：後藤洋子氏>

後藤氏が指導している三重大学教育学部教員養成課程（小学校教諭・中学校高等学校保健体育科教諭）の授業概要と評価観点、実際の授業で行っている体操について実技を交えながら紹介があった。学生の主体的な学びに繋げること、コミュニケーションスキルや運動能力の違いを踏まえながら個に応じた指導を心掛けているという話があった。



<社会体育の立場から：春山文子氏>

春山氏は高齢者を対象とした体操教室を主宰し、長きにわたり多くの対象者を横断的、縦断的に指導した経験から、体操は、基礎・基本動作の習得をADL、QOLに繋げていくといった実践

きゆうこう
躬行であること、対象者の目的や目標に応じて自由に創意工夫できること、生涯に渡って実践が持続可能であることを述べられ、また指導者に必要な力は、根拠に基づいて動きや行動の変容にむけた修正・助言ができること、人・もの・場・ことを変化させて対象者を飽きさせず運動

継続が可能になるような内容と方法を選択すること、そしてコミュニケーションの取りやすい雰囲気づくりが大切であるとの話があった。そして、それらの具体的な手立てとして長年開発されてこられた「導具」の紹介があった。



< 体育・スポーツ専門家養成大学の立場から：長谷川聖修氏 >

長谷川氏がこれまで考案した体操や国内外で発表した体操パフォーマンスの実例をもとに、ゲシュタルトクライス理論を用いて「ラジオ体操」をアレンジした「なかよしラジオ体操」の紹介、運動が苦手な子どもに対して内発的動機づけを誘発しながら動きを身につけられる場の工夫（トレーニング+プレイ→プレーニング）など、「生きた運動を生み出す」体操の展開について紹介があった。またこれからの高度情報化社会の中における体操指導の在り方として LMS（Learning management system：学習管理システム）やアプリなど ICT を活用した指導の工夫例の紹介があった。最後に、筑波大学で体操研究に携わった歴代指導者の指導論を例に挙げ、多様な方法論や価値観のある体操領域における止揚（多要素を高い次元で生かすこと）の可能性と期待について述べられた。



< ディスカッション >

講演内容について参加者から質問があり、それらに回答する形でディスカッションが進められた。

1) 学校現場における「体づくり運動」領域の困難感（授業づくり・現場教員の認識）について

→ 教員養成課程での授業で教えたことは現場に普及するまでは時間がかかる。また現場教員の「体づくり運動」領域に関する認識については丁寧に関わりながら伝えていく必要があると感じる。

体操学会が、教員が活用しやすい典型教材を発信したり、学校現場の教員と一緒に作り上げたりといった場となるとよい。

2) 「導具」を発案する際のポイントは？

→ 実施する対象者の動きの修正を導く（導く手具→導具）ことがポイントである。また使いやすい、体を動かしやすい、安価で作れるといった視点から廃材等をうまく活用して手作りで作成している。

3) 体操領域指導者の後継者養成についてどのように考えているか。

→

- ・ 体操指導者個人の思想や方法論については養成するというものではなく、その時に一緒に活動をした後進がその一部を継承したり、批判したりする中で形作られていくものなのではないか。
- ・ 一般体操領域は、運動内容や指導法などが多岐にわたるため全てを網羅した指導者資格として形作るのは難しいと考える。ただ、仲間や愛好者によってその体操は自然に時間をかけて広がり続いていくのではないかと思う。

・ 後継者については、思想などは継承するものではないと考えるが、実際の運動プログラムはフィットネス領域が行っているようにニーズに応じて、運動（体操）検定や指導者養成を行うと良いと思う。

4) 運動の「効力感」や「有能感」を実施者に感じてもらうためにどのような指導を心掛けているか。

→主体は実施者本人にある（教える側の考える方向性でやっているのではなく、「あなたが、自分の意志で自分の体を操っている」）ことに対して評価することが大切だと考える。

進行の大塚隆氏より、シンポジスト全体を通じて体操領域は「何を」「どう」教えるか、の「何を」の部分が問われることが他領域にはない体操の特徴であり、指導者はよい場づくりと多様性を認める等の指導の工夫が求められることを学んだといった総括があった。

参加者より多くの意見がありシンポジストとの活発な議論がなされたジムナスティック・シンポジウムとなった。

分科会活動総括：キッズ、学校体育、中・高齢者

運営委員会委員長である筑波大学の本谷聡氏より、分科会活動について報告された。

分科会設立の趣旨は「現場が求めている実践的指導方法の検討と共有」で、平成 28 年に始められた。第 7 期（H28～H30 年度）は学会大会内での活動で、第 8 期（R1～R3 年度）は運営委員会を設立し学会大会外での活動を進めた。

令和 3 年度はコロナ禍ということもあり、各分科会ともオンラインで活動した。中・高年齢分科会は、2 月より偶数月の 23 日に 20:00～1 時間のオンラインセミナーを実施し、毎回 20～30 名が参加した。学校分科会は 3 回実施し、11 月 20 日・21 日には第 17 回体操研究集会として「体操カンファレンス 2021」を企画実施した。キッズ分科会は 3 回の検討会を行い、学会 HP にプログラムの動画を掲載している。いずれも報告が HP にアップされている。

活動が順調に進んでいることもあり、運営委員会は終了して、第 9 期（令和 4 年度～）は各分科会で活動をさらに進めていくこととなった。

公募研究プロジェクト報告

公募研究プロジェクト報告では、前原千佳氏（筑波大学大学院）らの「体操授業指導者の指導観に関するインタビュー調査研究」と題した研究の成果が報告された。前原氏は、体操指導の専門家が指導時に意識していることや指導に対する考え方（指導観）を調査した結果の報告を行った。質疑応答では M-GTA（Modified Grounded Theory Approach：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）の分析方法についての質問がなされ、活発な議論が展開された。

実践報告・研究発表

5 題の発表があった。①檜皮貴子氏（新潟大）「運動を用いた乳児の寝かしつけに関する研究ーリズム体操と屋内外歩きを比較してー」、②大友康幹氏（日体大）「カンボジア体育教育の現状と課題ー体育教員養成校 NIPES での活動についてー」、③吉中康子氏（京都先端科学大学）「京都府を中心に展開する介護予防音楽体操の至適テンポの研究ー新型コロナ禍での動画公開の制作過程の検証ー」、④板谷厚氏（北海道教育大旭川校）「COVID-19 パンデミック下のステイホーム期間における大学生の体力・運動能力の経時変化」、⑤早野曜子氏（自由学園）「日本におけるデンマーク体操の普及に関するー考察ー1931年から現在までー」と、乳児・海外・大学生・高齢者・デンマーク体操とバラエティーに富んだ内容で、いずれも興味深い内容であり、オンラインでしっかりと聴くことができた。

情報交換会

冒頭に第 22 回学会大会について、日本体育大学の三宅良輔氏より案内があった。令和 4 年 11 月 12 日（土）・13（日）に日本体育大学世田谷キャンパスで「これからの体操のあり方」をテーマに計画を進めていることが報告された。次回大会は対面で実施できることを願っている。

ブレイクアウトルームが 10 部屋用意され、それぞれ参加したいルームに各自が移動して情報交換を進めた。実際にはメインルームを含め 5 部屋に分かれていた。Zoom でいくつかに分かれての情報交換は、新たな取り組みで興味深かったが、どのように分かれて行うかに難しさを感じた。最後にメインルームに戻り、記念撮影をした。



令和 3 年度日本体操学会理事会／総会報告

令和 3 年度日本体操学会総会が、9 月 11 日（土）に Zoom を活用して開催された。

第 21 回大会は、板谷厚常任理事が実行委員長となり、Web を活用して令和 4 年 3 月に開催することが決定し、準備を進めていくことが決まった。

編集：日本体操学会広報委員会 檜皮 貴子、砂田 真弓、鞠子 佳香、古屋朝映子、鈴木 慶子